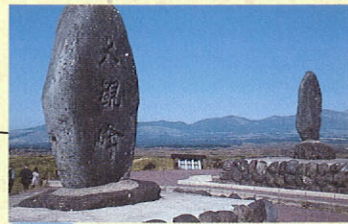


絶えることなく噴煙を上げ、季節ごとのすばらしい眺めを見せる阿蘇。その大いなる山ふところに抱かれに、さまざまな詩人、歌人、俳人、小説家たちが訪れてきた。ここで人は、阿蘇の雄大さを、厳しさを、寂しさを、さまざまな言葉につむいできた。その跡をたどり、気づかなかった阿蘇の魅力に触れる旅に出た。



■吉井勇歌碑
大阿蘇の山のけむりはおもしろし
空にのほりて夏雲となる
高浜虚子句碑
秋晴の大観峰に今来たり



国木田独歩文学碑



大観峰

■与謝野寛自筆の短冊
頂にきて頂をわすれしむ
霧ふる阿蘇の大いなるかな

■与謝野寛自筆の短冊
頂にきて頂をわすれしむ
霧ふる阿蘇の大いなるかな

高森町



中岳火口

▼わが心にある、故郷の原風景
わが故郷は荒涼たるかな
墨々として火山岩のみ
黒く光り
高原の陽は肌寒くして
山間の小駅に人影もなし
蔵原伸一郎「故郷の山」(後略)
伸一郎は、阿蘇郡黒川村(現・阿蘇町)生まれの詩人。母は世界的細菌学者、北里柴三郎の妹。「故郷の山」は、「神さびた」大阿蘇の風景を歌った作品。その力強いリズムが、記憶の底に焼き付いて離れない。ここに描かれた情景は、今まで見知ったどんな阿蘇とも違う。春のやさしい若草色、秋のすすきの銀色、ドライブの途中眺める阿蘇は、雄大で美しい峰だ。
冬の初め、キーンと空気が冷たく、冴える晴れた日。観光客が去った火口付近は、まさしく「荒涼たる」風景だ。噴煙が雲と一つになる。「肌寒」い日の光が、登山道の果てに広がる草原にあたる。
今、伸一郎が育った辺り、阿蘇町西町、道のすぐ脇に詩碑が立つ。
▼江戸時代、阿蘇にもいた芭蕉ファン
確かめたいことがあった。九州の地を踏んだことがないはずの松尾芭蕉の句碑が、阿蘇登山道沿い、坊中の西蔵殿寺にあるという。寺の入り口にある石碑は、風化して文字が見えない。八十五歳で、いまだかくしゃく、朗々と経を詠む住職が句を教えてくださいました。

▼酒飲めばいと寝られぬ窓の雪
他の歌とあわせ、建立はおそらく天保年間。江戸からはるかな阿蘇の地に、これほど芭蕉を愛した人がいたのだ。杉木立ちの境内は、なるほど、芭蕉が見れば一句詠みそうな風情をかもした。す。
▼珍道中の二人に会えそうな草原
この阿蘇登山道坊中線、料金の所近く。生い茂る草に隠れるように、夏目漱石「二百十日」文芸碑は立っている。圭さん、碌さんの二人が、たまに文明批判をチクリと織り交ぜ掛合い漫才のように話をしながら阿蘇登山の珍道中。小説「二百十日」は、明治二十二年、漱石自身が阿蘇登山の途中道に迷った経験をもとにしたもの。この辺りが、漱石が道に迷った場所だった。
碑の向こうの草原に一歩足を踏み入ると、茫茫として方角も分からない。この時漱石が泊まった旅館「山王閣」が内牧にある。当時の部屋は、漱石記念館として保存されている。こん、と頭を鴨居にぶつけそうになりながら部屋に入ると、小説に登場するエビスビールが。窓の外には阿蘇五岳が横たわる。
▼終えんの地に落ち葉散りしく：
内牧からの石へ。隼鷹神社の横にある、参勤交替の大名の休憩所だった石御茶屋跡。代々御茶屋番を務める小系家十三代当主、小系豊寛さん七十一歳。境内に建つ、熊本市生まれの歌人、宗不早の歌碑まで案内してくれました。不早がこの地を訪れたのは、「昭和十年

大いなる阿蘇よ、時にたおやかに、時にきびしく人と文学をかもしてきた。

D A T A

■大観峰
阿蘇の外輪山のうち、内牧から小国、杖立に向かう峠から東にかけて。遠見ヶ鼻とも呼ぶ。「大観峰」は、徳富蘇峰が名付けた。蘇峰の碑や、吉井勇の歌碑がある。売店の近くには、高浜虚子の句碑も建っている。

■与謝野寛・晶子 歌碑
内牧温泉「蘇山郷」
昭和7年、阿蘇へ来た夫妻はここに宿泊。樹齢600年以上という立派な杉を使ったその部屋は、今も当時のまま。歌碑は、熱烈な恋愛結婚をした二人にふさわしく、庭に仲良く並んでいる。

■草千里ヶ浜
詩「草千里」を書いた詩人三好達治は、3回阿蘇に登った。2回目の来熊(昭和11年)の後に書いたこの詩で、彼は「名もかなし草千里浜」と詩っている。

■野口雨情 民謡碑
垂玉温泉「山口旅館」
「七つの子」「十五夜お月さん」などで知られる野口雨情。現在94歳の山口忠さんは、昭和9年雨情がここを訪れた時、自ら垂玉を案内したという。碑の除幕式には雨情の妻つるさんらを招待。

■若山牧水・喜志子 歌碑
栃木温泉「荒牧旅館」
酒と旅をこよなく愛した歌人とその妻が栃木温泉へ来たのは大正14年。旅館は、昭和61年ダム建設のため現在の国道325号沿いに移転。歌碑もその時に移された。

■国木田独歩 文学碑
独歩は明治26年阿蘇に登った時の体験をもとに、小説「忘れ得ぬ人々」の一部を書いたという。小説には、阿蘇の宮地の馬子が登場する。

■古閑の滝
外輪山の100m近い断崖を落ちる滝。迫力では阿蘇No.1といえる。冬期には凍りつくことで有名。



■風穴
溶岩が流れる時に、溶岩流内部のガスが噴き出したりしてできる空洞。米塚ハイキングコースの近くに点在する。



宗不早歌碑
的石御茶屋跡

■与謝野寛夫妻歌碑
霧の色ひときは黒し
かの空にありて煙るか阿蘇の頂
うす霧や大観峰によりそひて
朝がほのさく阿蘇の山荘
晶子



夏目漱石ゆかりの宿
内牧温泉「山王閣」



西蔵殿寺



草千里ヶ浜



野口雨情自筆の歌
(垂玉温泉「山口旅館」蔵)



山口忠さん
野口雨情を案内した
思い出を語ってくれた。

■若山牧水夫妻歌碑
名を聞きて久しかりしか
柵の木ので湯に來り入ればたのしき
妹と背の通つ瀬なれや
目ざましのたきにそひたるかへりの滝
喜志子



若山牧水夫妻歌碑
栃木温泉「荒牧旅館」

■野口雨情民謡碑
秋の紅葉は、山から山へ
阿蘇の垂玉 よいながめ

五年ごろだったと聞いたりします。不早さんはこの御茶屋の縁側に座つて、父と茶を飲んで行かれたそうですよ。当時私は戦争に行つたりしました。南方へ」
不早は二十九歳の時から朝鮮、中国、台湾を放浪し、結婚後も国内を転々とした。阿蘇町在住の俳人阿蘇の文学に詳しい森昭夫さんは、彼を、漢文と万葉の素養豊かな、孤高の歌人「と絶賛する。隼鷹宮で不早が詠んだのは、
隼鷹の宮居の神は敷なかの
石の破片にておはしけるかも
万葉調の、素朴なかわいらしい歌だ。昭和十七年、内牧温泉を後にして行方不明になった不早。菊池郡旭志村の鞍馬でひっそりと生を終えたといわれる。終えんの地と思われる場所へ、落ち葉を踏みしだいて進む。一人ではいたたまれなほどの静寂。歌碑に、
山に居れば遠方野辺のもえ草を
ここに留めて高きより見る